セッションⅡ　総括と感想

秋　山　光　文

本セッションは、「横浜開港及び日英修好通商条約締結150年を機に、日本とヨーロッパにおける美術とモードの変革に、絹織物あるいは広く織物（テキスタイル）が果たした役割に着目する。明治期日本での紡績技術の普及におけるフランスの先駆的行動を見直し、テキスタイルの図案やデザインの相互影響といった点から、ジャポニスムの時代から今日までの日仏相互の美術交流の歴史を辿りたい。その多様で豊かな相互関係を浮き彫りにするために、テキスタイル・アートの技術、デザイン、コレクションを検証しながらこの問題に取り組んでいく。」との趣旨をもとに、ロール・シュワルツ＝アレナレス准教授が企画立案し、テーマに沿った研究発表が可能な内外の研究者と連絡を取ることからスタートした。

フランスから参加を表明していただいたのはオーレリー サミュエル氏（ギメ美術館クリシュナ・リブー織物コレクション担当）、廣瀬緑氏（パリ第７大学、准教授）、円谷智子（パリ第１大学博士課程）の諸氏であり、徳井淑子教授のご紹介によって本学の出身者でもある高木陽子氏（文化女子大学教授）と全体を見通す基調講演者として深井晃子氏（本学名誉博士、京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）にも参加していただけることとなった。

セッション当日の様子については、徳井教授、シュワルツ＝アレナレス准教授の報告に詳しいが、廣瀬緑氏が体調不良によりシンポジウム開催直前になって参加を見送られたことにより、徳井教授が原稿を代読するという不測の事態はあったものの、本セッションを無事に終了できたことは、関係者の一人として喜びに堪えない。さらに、締め切りまで１ヶ月余という短期間であったのも拘わらず、発表者諸氏からは報告書の原稿が期限までに届けられたことにより、報告書の発行も順調に進められることになろう。ここに改めて皆様のご協力に深く感謝申し上げたい。

今回のセッションに関しては、企画者のシュワルツ＝アレナレス准教授の着想の豊かさと内外の研究者に関するネットワークの広さ、セッション遂行に向けての驚異的な献身ぶりに負うところが少なくない。さらに、全体パネルディスカッションの司会ばかりでなく、参加を取りやめられた廣瀬氏の原稿代読という役まで引き受けてくださった徳井淑子教授にもお礼を申し上げたい。最後に、当日の会場運営の補助として活躍した頂いた比較日本学教育研究センターのスタッフの皆さん、大学院教育改革支援プログラムのメンバーの方々、通訳を担当していただいた梶浦彩子氏にも心よりの謝意をお伝えしたい。